

[B年] 終末主日(2023年11月26日)

【旧約聖書日課】 エレミヤ書 23章1～6節

1「災いだ、わたしの牧場の羊の群れを滅ぼし散らす牧者たちは」と主は言われる。2それゆえ、イスラエルの神、主はわたしの民を牧する牧者たちについて、こう言われる。

「あなたたちは、わたしの羊の群れを散らし、追い払うばかりで、顧みることをしなかった。わたしはあなたたちの悪い行いを罰する」と主は言われる。

3「このわたしが、群れの残った羊を、追いやったあらゆる国々から集め、もとの牧場に帰らせる。群れは子を産み、数を増やす。4彼らを牧する牧者をわたしは立てる。群れはもはや恐れることも、おびえることもなく、また迷い出ることもない」と主は言われる。

5 見よ、このような日が来る、と主は言われる。わたしはダビデのために正しい若枝を起こす。王は治め、栄えこの国に正義と恵みの業を行う。

6 彼の代にユダは救われイスラエルは安らかに住む。彼の名は、「主は我らの救い」と呼ばれる。

【使徒書日課】 ヨハネの黙示録 1章4～8節

4<sup>5</sup>ヨハネからアジア州にある七つの教会へ。今おられ、かつておられ、やがて来られる方から、また、玉座の前におられる七つの霊から、更に、証人、誠実な方、死者の中から最初に復活した方、地上の王たちの支配者、イエス・キリストから恵みと平和があなたがたにあるように。わたしたちを愛し、御自分の血によって罪から解放して下さった方に、<sup>6</sup>わたしたちを王とし、御自身の父である神に仕える祭司として下さった方に、栄光と力が世々限りなくありますように、アーメン。

7 見よ、その方が雲に乗って来られる。

すべての人の目が彼を仰ぎ見る、ことに、彼を突き刺した者どもは。地上の諸民族は皆、彼のために嘆き悲しむ。然り、アーメン。  
<sup>8</sup>神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。  
「わたしはアルファであり、オメガである。」

【福音書日課】

ヨハネによる福音書 18章33～40節

<sup>33</sup>そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、「お前がユダヤ人の王なのか」と言った。<sup>34</sup>イエスはお答えになった。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか。」<sup>35</sup>ピラトは言い返した。「わたしはユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をしたのか。」<sup>36</sup>イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。」<sup>37</sup>そこでピラトが、「それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」<sup>38</sup>ピラトは言った。「真理とは何か。」

ピラトは、こう言ってからもう一度、ユダヤ人たちの前に出て来て言った。「わたしはあの男に何の罪も見いだせない。<sup>39</sup>ところで、過越祭にはだれか一人をあなたたちに釈放するのが慣例になっている。あのユダヤ人の王を釈放してほしいか。」<sup>40</sup>すると、彼らは、「その男ではない。バラバを」と大声で言い返した。バラバは強盗であった。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## エレミヤ書23章1～6節

<sup>1</sup>災いあれ、私の牧場の羊の群れを減ぼし、散らす牧者に——主の仰せ。<sup>2</sup>それゆえ、イスラエルの神、主は、私の民を牧する牧者についてこう言われる。あなたがたは、私の羊の群れを散らし、追い払い、顧みなかった。そこで、私はあなたがたの悪行を罰する——主の仰せ。

<sup>3</sup>しかし私は、群れの残りの者を、追いやったすべての地から集め、自分たちの牧場へ帰らせる。彼らは多くの子を産み、増える。<sup>4</sup>私は彼らの上に牧者を立てて牧させる。彼らは二度と恐れることなく、おののくことなく、失われることもない——主の仰せ。

<sup>5</sup> その日が来る——主の仰せ。

私はダビデのために正しい若枝を起こす。  
彼は王として治め、悟りある者となり  
この地に公正と正義を行う。

<sup>6</sup> その日には、ユダは救われ

イスラエルは安らかに暮らす。  
彼の名は、「主は我々の義」と呼ばれる。

## ヨハネの黙示録1章4～8節

<sup>4</sup>ヨハネからアジア州にある七つの教会へ。今おられ、かつておられ、やがて来られる方から、玉座の前におられる七つの霊から、<sup>5</sup>また、真実な証人にして死者の中から最初に生まれた方、地上の王たちの支配者、イエス・キリストから、恵みと平和があなたがたにあるように。

私たちを愛し、その血によって罪から解放してくださいました方に、<sup>6</sup>私たちを御国の民とし、またご自分の父である神に仕える祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくありますように、アーメン。

<sup>7</sup> 見よ、この方が雲に乗って来られる。

すべての人の目が彼を仰ぎ見る、  
ことに、彼を突き刺した者どもは。

地上の部族は皆、彼のために嘆き悲しむ。  
然り、アーメン。

<sup>8</sup>今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者である神、主がこう言われる。「私はアルファであり、オメガである。」

## ヨハネによる福音書18章33～40節

<sup>33</sup>そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、「お前はユダヤ人の王なのか」と言った。<sup>34</sup>イエスはお答えになった。「あなたは自分の考えて、そう言うのか。それとも、ほかの者が私について、あなたにそう言ったのか。」

<sup>35</sup>ピラトは答えた。「私はユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前を私に引き渡したのだ。一体、何をしたのか。」<sup>36</sup>イエスはお答えになった。「私の国は、この世のものではない。もし、この世のものであれば、私をユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし実際、私の国はこの世のものではない。」<sup>37</sup>ピラトが、「それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「私が王だとは、あなたが言っていることだ。私は、真理について証しをするために生まれ、そのために世に来た。真理から出た者は皆、私の声を聞く。」<sup>38</sup>ピラトは言った。「真理とは何か。」

ピラトはこう言ってから、まだユダヤ人たちのところに出て来て言った。「私はあの男に何の罪も見いだせない。<sup>39</sup>ところで、過越祭には誰か一人をあなたがたに釈放するのが慣例になっている。あのユダヤ人の王を釈放してほしいか。」

<sup>40</sup>すると、彼らは叫んで、「その男ではない。バラバを」と言った。バラバは強盗であった。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・11月26日「降誕前第5主日」の日課主題は「救いの約束(モーセ)」。この日は伝統的な教会暦では一年一巡りの終わりに当たる「終末主日」で、教団の行事暦では「収穫感謝日」。伝統的な教会暦を継承する主流教派が用いる「改訂共通聖書日課」では、「王であるキリストの主日」の呼称を用いている。

・旧約聖書日課は、「エレミヤ書」から、「羊の群れ」にたとえられる「ユダ」の回復を預言する箇所。使徒書日課は、「ヨハネの黙示録」から、冒頭序言に伴う神讚美の箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、総督ピラトによる主イエスの裁判を伝える箇所。

**旧約日課(エレミヤ23章より)**

・「エレミヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第三に置かれた預言書。前7世紀後半、南王国ユダ末期の王ヨシヤの時代(記述通りであれば前628年頃)から南王国滅亡(前588年頃)まで宮廷預言者として活動した「預言者エレミヤ」の預言集および活動録としてまとめられている。紀元前の写本の中に比較的大きな異同が認められ、正典化に際して扱いがなお流動的であったと推認される。ヨシヤ王の時代は、前世紀(前8世紀)に北王国イスラエルを滅亡させ南王国を属国化していた大国アッシリアが急速に衰退し始め、代わりにメソポタミア東方のメディア、南方のバビロニアが台頭、バビロニア・メディア連合軍によってアッシリアの首都ニネベが陥落する(前612年頃)という時代であった。アッシリアの属地であった旧北王国領域には支配権の空白が生まれており、南王国ヨシヤ王は、宗主国アッシリアと断絶しバビロニアと手を組むことで北方域の支配権を確保することを試み、王国統治の中央集権化を図る改革に着手していた。「列王記」下22~23章に伝えられる一連の改革は、その一環として支配下領域での宗教統制を企てたことを反映していると思われる。「預言者エレミヤ」は、地方聖所「ベニヤミンの地のアナト」の祭司の家に生まれたが、この改革で自身の属する聖所祭司団が「エルサレム祭司団」の元に統合されたことによって、若くしてエルサレムの「宮廷預言者」に登用されたと考えられる。なお、「ベニヤミン族」は、前11世紀の「サウル王」の出身部族でもあり、元来は北方諸部族との結びつきが強かったと考えられるが、ソロモン王没後の南北王国時代には、ユダ族に取り込まれる形で南王国を構成するようになっていた。「サウル王」の王国は「イスラエル」の国名で知られており、ベニヤミン族が南王国を構成してきたことは、南王国が旧「イスラエル王国」の地である北方領域を支配下に置こうとする動機にもなったであろうし、大義にもなったと考えられる。そのような「大イスラエル主義」の思想は、北王国滅亡と共に北部から亡命してきていた者たちによっても強められていたと推認される。

・日課箇所のように王国を「牧場の羊の群れ」とたとえ、統治者(王⇨神)を「牧者(羊飼い)」ととえることは、古代オリエントでは少なからず知られている。南王国では、理想化された「王」として祖王「ダビデ」が「羊飼い」出身であったという伝承があり(サムエル記下16章など)、また、「主」を真の「羊飼い」にたとえた典礼も知られている(詩編23など)。また、南王国滅亡前後に捕囚地バビロンで虜囚ダビデ王家に仕える祭司として活動した「預言者エゼキエル」の預言書にも、日課箇所に酷似したたとえの預言が見られる(エゼキエル書34章)。

・6節「主は我らの救い」の直訳は「主(ヤハウェ)・我らの義(チドケヌー)」。これは「ダビデ」の「名」として提示されているが、「ゼデキヤ王(チドキヤフー)」を指すと解する者もある。「ゼデキヤ王」は、南王国最後の王で、11年間王位にあったが、エルサレム陥落後に捕らえられてバビロンに連行され、王子らを殺され、自身も両眼をつぶされて牢に繋がれて生涯を終えたとされる。なお、ゼデキヤ王の二代前、第一次捕囚(前598年頃)にバビロンに連れて行かれた「ヨヤキン王」は厚遇を受け、ネブカドネザル王没後には名誉回復を受けたとされている(列王記下25:27以下)。「主・我らの義」という呼称は33:16でも提示され、そこでは「ユダ・エルサレム」の名とされている。

**使徒書日課(黙示録1書)**

・「ヨハネの黙示録」は、新約正典の最後に置かれた黙示文書。「僕ヨハネ」の名で著され、書簡文書としての体裁が残されているが、幾度かの編集を経て現在の形にまとめられたと推認される。正典としての扱いについては長く議論の対象とされた内の一書で、397年に開催されたカルタゴ会議で決着を見たと言われる。

・日課箇所宛名とされている「アジア州にある七つの教会」は、1:11に列挙される各地に所在した。これら諸都市は環状街道で結ばれ、共通の文化・経済圏を形成していたとされる。その中で、「エフェソ」および「ラオディキア」は、「パウロ書簡集」でも宛先教会として挙げられる都市で、パウロ宣教団の影響が少なからずあったと推認される。なお、「コロサイの信徒への手紙」の「コロサイ」は、「ラオディキア」の直近に所在する都市で、同書では両都市の教会が書簡の交換をするように促されている(コロ4:16)。

・日課箇所を含めて、本書には、後年の教会で典礼文として用いられるようになった句が少なくない。おそらく、元来が典礼文として用いられるようになり始めていた章句や表現を多用して、編纂されたのだろう。黙示文学の様式は、象徴表現や極端な比喩表現など典礼様式と親和性がある。

・本書には、キリストを「王の王、主の主」(19:16)とする思想があるが、日課箇所「王」であり「祭司」とされているのは、「わたしたち」すなわちキリスト信者であり(6節)、キリストと信者の一体化が指向されている。

## 福音書日課(ヨハネ 18 章より)

・日課箇所は、逮捕された主イエスがユダヤ総督ピラトの前で取り調べを受けている場面。この場面は、四福音書が共通して伝えているが、「ヨハネ」だけが拡大して伝えるピラトと主イエスの対話部分がある(34~38a 節)。この拡大部分は、「お前がユダヤ人の王なのか」という問いに対する主イエスの応答を拡大し、その意味をより明確にしようとする意図で加えられているものと考えられる。

・36 節の言説は、主イエスが自らの「ユダヤ人の王」という位置づけを否定あるいは留保して、「わたしの国」という超世俗的支配を提示しているものと解される。当時の「ユダヤ」には、前 2~1 世紀の「ハスモン王朝」を継承した「ヘロデ王家」がなお「ユダヤ人の王」として名目上存在し続けていた一方、この系譜の王家が「ダビデ王家」でないことからその正統性を否定し、「ダビデ王家」による「ユダヤ人の王」(つまりメシア!)の再興を待望する運動もあった。この節の言説は、その両者を否定する意図があったかもしれない。

## 来週の誕生日 (11 月 26 日~12 月 2 日)

## 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-358 番「小羊をばほめたたえよ！」(= I 164 番)は、19 世紀英国の詩人ブリッジズの原作を国教会司祭スリングが修正、また全面改訂した結果生まれた諸版が混同再録されてきた讃美歌で、『讃美歌 21』は米国聖公会版からの翻訳。曲は、19 世紀英国王室チャペルのオルガニスト・エルヴィーの作曲。
- ・21-386 番「人は畑をよく耕し」(= I 422 番)は、18-19 世紀ドイツの文筆家マティアス・クラウディウスの長編詩「パウル・エルトマンの祝祭」の一部で、こどものための唱歌集に収録されて歌われるようになった。216 番「月はのぼりて」も同氏の作詞。曲は、216 番と同じハーゲン宮廷楽長として知られるヨハン・A.P. シュルツの作曲とされるが詳細は不詳。
- ・21-528 番「あなたの道を」(= I 280 番)は、17 世紀ドイツを代表する讃美歌作家パウル・ゲアハルトが詩編 37:5 から着想して作詞した 12 節の讃美歌詞に、18 世紀ドイツの作曲家 J.M.ハイドンの曲が組み合わせられているが、現行のドイツ語讃美歌では別の曲と組み合わせられている。ジョン・ウェスレーの英訳詞(Give to the Winds Thy fears)によって、英語讃美歌集でも歌い継がれている。

## 21-358「小羊をばほめたたえよ」

## Crown Him with Many Crowns

1. Crown him with many crowns, / the Lamb upon his throne;  
/ Hark! how the heavenly anthem drowns / all music but its own;  
/ awake, my soul, and sing of him / who died for thee,  
/ and hail him as thy matchless King / through all eternity.
2. Crown him the Son of God / before the worlds began,  
and ye, / who tread where he hath trod, / crown him the  
Son of man; / who every grief hath known / that wrings the

- human breast, / and takes and bears them for his own, / that all in him may rest.
3. Crown him the Lord of life, / who triumphed over the grave,  
/ and rose victorious in the strife / for those he came to save;  
/ his glories now we sing, / who died, and rose on high,  
/ who died, eternal life to bring, / and lives that death may die.
  4. Crown him of lords the Lord, / who over all doth reign,  
/ who once on earth, the incarnate Word, / for ransomed sinners slain,  
/ now lives in realms of light, / where saints with angels sing  
/ their songs before him day and night, / their God, Redeemer, King.
  5. Crown him the Lord of heaven, / enthroned in worlds above;  
/ crown him the King, to whom is given, / the wondrous name of Love.  
/ Crown him with many crowns, / as thrones before him fall,  
/ crown him, ye kings, with many crowns, / for he is King of all.

## 21-386「人は畑をよく耕し」

## Wir pflügen und wir streuen (Alle gute Gabe)

1. Wir pflügen, und wir streuen / den Samen auf das Land, /  
doch Wachstum und Gedeihen / steht in des Himmels Hand:  
/ der tut mit leisem When / sich mild und heimlich auf /  
und träufft, wenn heim wir gehen, / Wuchs und Gedeihen drauf.
- Refr.: 1.-4.  
*Alle gute Gabe kommt her von Gott dem Herrn, / drum dankt ihm, dankt, drum dankt ihm, dankt / und hofft auf ihn!*
2. Er sendet Tau und Regen / und Sonn- und Mondenschein,  
/ er wickelt seinen Segen / gar zart und künstlich ein / und  
bringt ihn dann behende / in unser Feld und Brot: / es geht  
durch unsre Hände, / kommt aber her von Gott.
3. Was nah ist und was ferne, / von Gott kommt alles her, /  
der Strohalm und die Sterne, / der Sperling und das Meer.  
/ Von ihm sind Büsch und Blätter / und Korn und Obst von ihm,  
/ das schöne Frühlingswetter / und Schnee und Ungestüm.
4. Er läßt die Sonn aufgehen, / er stellt des Mondes Lauf; / er  
läßt die Winde when / und tut den Himmel auf. / Er schenkt  
uns so viel Freude, / er macht uns frisch und rot;  
er gibt den Kühen Weide / und unsern Kindern Brot.

## 21-528「あなたの道を」

## Befiehl du deine Wege

## 英語版 Give to The Winds Thy Fears

- 1 Give to the winds thy fears, / hope and be undismayed; /  
God hears thy sighs and counts thy tears; / God shall lift  
up thy head. / Through waves and clouds and storms, / He  
gently clears the way; / wait thou His time, so shall this  
night / soon end in joyous day.
- 2 Still heavy is thy heart, / still sink thy spirits down? / Cast  
off the weight, let fear depart, / and ev'ry care be gone. /  
What though thou rulest not, / yet heav'n, and earth, and  
hell / proclaim, God sitteth on the throne, / and ruleth all  
things well.
- 3 Leave to His sov'reign sway / to choose and to command,  
/ so shalt thou wond'ring own His way, / how wise, how  
strong His hand! / Far, far above thy thought / His counsel  
shall appear, / when fully He the work hath wrought, / that  
caused thy needless fear.
- 4 Thou seest our weakness, Lord, / our hearts are known to  
Thee; / O lift Thou up the sinking heart, / confirm the feeble  
knee. / Let us in life, in death, / Thy steadfast truth declare,  
/ and publish with our latest breath / Thy love and guardian  
care.